

連載 44 新しい方言①
タリン・シン



「これにシンかあ」「資料がタリンねえ」
小松短大キャンパス仲間の
中西郁未さん(左)、今田順也さん(中)、斉藤
彰一さん(右)

世代を中心に使われる新しい方言をご紹介してみたいと思います。
最近では全国各地で伝統的方言が衰退し、共通語化が進んでいます。地域による共通語化の度合いの違いこそあれ、北陸地方、そして小松でもそれは同じです。しかしその一方で、今なお新しく生まれている方言もあるのです。

中間的スタイルを「ネオ方言」と言っています(という新しい形が生まれました。50歳代以上では男女ともにまだタランが優勢ですが、女性では40歳代以下、男性でも20歳代以下では明らかにタリンの方が優勢になっています。20歳代以下では、男女平均でタランが3割弱、タリンが5割程度使用されています。

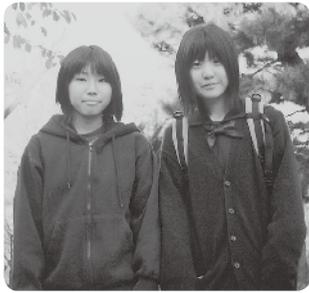
参考にした資料は、平成11年の夏に小川有美さん(現在金沢大学大学院生)が筆者の指導で龍助町・東町の10歳代から70歳代の方々計189名の協力を得て行ったアンケート調査の結果です。

同様に、「仕事をしない」と言ふときの「しない」に当たる言い方でも、本来の方言形「シン・セン」(シンからの変化)が共通語形「しない」の影響によって、新しいシン(セン+シナイ)という形を生んでいます。タリンほどではありませんが、50歳代からわずかにその使用が見られ、20歳代以下では2割から3割の人が使っています。

店々、ある品物を買おうと思って財布を見たお金不足で「お金足りない」と思わすつづやくとしたり「足りない」と思わすつづやくとしたり「足りない」と思わすつづやくとしたり(西日本方言形、五段活用「足る」の否定形が小松での本来の言い方ですが、タリンと共通語形タリナイの傍線部が混ざったタリン)このような方言と共通語

こういう時代ですから共通語形タリナイ、シナイは今後も間違いなく小松にも浸透していくでしょう。しかし、それらとは使用場面を異にする形で(日常的場面で使用される方言として)、新しい方言形タリン、シンもこれからさらに勢力を強めていくと予想されます。

連載 45 新しい方言②
ンカッタ、ンクナッタ



「でっけハト見ンクナッタ」
「そうけ」
(芦城公園で)

書カンカッタ、書ケンクナッタの形も共通語の影響

前回ご紹介したタリン、シンのように、方言が共通語の干渉を受けて新しく成立した方言(方言と共通語の中間的スタイル)を「ネオ方言」と呼びます。井上史雄氏(東京外国語大学教授の言う「新方言」(共通語とは無関係に若い世代において新たに発生し、かつ勢力を広げつつあるもので、使用者にも方言と意識されているもの)と区別して真田信治氏(大阪大学

教授)が名付けたもので、タリン、シンのほかでは、小松を含む北陸地方や西日本地域で若い世代を中心に使われる、書カンカッタ(書かなかった)、書ケンクナッタ(書けなくなつた)のンカッタ、ンクナッタなどもその例です。それぞれ、方言形「書カン」(書かない)、「+共通語形」(書力ナカッタ)、方言形「書ケン」(書けない)、「+共通語形」(書ケナクナッタ)の傍線部が組み合わさって生まれた形です。

動詞によって差のあるンカッタの使用

小松市中部の龍助町・東町では、ンカッタの形は、ンクナッタの形に比べ早くから使用されていたようで、「しなかつた」の意のセンカッタは全世代で5〜6割の人が使用しています。シンカッタも40歳代以下で使用が増加し、本来の方言形だったセンダはあまり使われなくなっています。一方、書カンカッタ、見ンカッタ(見なかつた)、来ンカッタ(来なかつた)は、40歳代以下でも3〜4割程度の使用にとどまっていて、今も本来の方言形(書力ナ)ンダ、見(来)ンダ、来(ナ)ンダ

が優勢です。

ンクナッタは30歳代以下で急増

それに対し、書ケンクナッタ、見レンクナッタなどのンクナッタの形は、30歳代以下で女性中心に使用が急増し、20歳代以下では男女平均で7〜8割が使用しています。また、共通語形のンクナッタも増えつつあり(平均で3割前後)、書けなくなつた「見られなくなつた」の意で使われてきた本来の方言形、書ケンヨーニナッタ、見レンヨーニナッタは、若い世代でほとんど使われなくなっています。それに代わって市中部で確実に勢力を広げているのがンクナッタの形というわけです。タリン(足りない)、シン(しない)にしても、ンカッタ、ンクナッタにしても、共通語との干渉によって生じた「ネオ方言」形であることから、比較的フォーマルな場面でも使える(地方共通語的)形と意識されている傾向があります。そのような意識も、新しい方言形としての勢力拡大を支えているのだと考えられます。

連載
46

新しい方言③
タツタ、メツチャ



「お昼や」
「タツタ腹へった」
フレッシュマンのランチタイム

新しい年を迎え、今回も引き続き小松中心部での新しい方言現象を取り上げることにします。先月、先々は、共通語との干渉によって生まれた「ネオ方言」の例をご紹介しますが、今回は、井上史雄氏の言う「新方言」の例を見てみたいと思います。井上氏は「新方言」を、(1)若い世代に向けて使用者が多くなりつつあり、(2)使用者自身も方言扱いしている、(3)共通語では使わない言い方、と定義しています。新しい方言の成立が共通語の干渉とは無関係であり、使用者にも方言と意識さ

れているところが「ネオ方言」との違いです。

「新方言」の生まれやすい強調表現

若い人はいつの世にも大げさな表現、強調した物言いを好むと言われます。例えば、「とても」「すごく」にあたる強調語もその例の一つです。そのせいか、強調語の世界では今なお全国各地(特に西日本)でさまざまな「新方言」が生まれています。東京を中心に主に東日本で使われる「チョー」、関西地方のメツチャがその代表ですが、ほかにも、デーレー・ペラ(愛知県)、ブチ(岡山県・広島県・山口県)、バリ(山口県・福岡県・長崎県)、シンケン(大分県)、タイギャ・マーゴツ(熊本県)、ワッゼー(鹿児島県)など、実に多彩な言い方が新しく生まれています。

小松の強調語の「新方言」はタツタ、メツチャ

小松市中心部(龍助町・東町)での世代別調査によると、「とても腹が立った」と言うときの「とても」にあたる言い方に



「オキレやー」、「おやつ…」
やけど、もうちょっと寝かしとこつ。と先生。
梅田保育所で

連載
47

新しい方言④
オキレ、ミレ、アケレ

これまで3回にわたって小松市中心部での新しい方言現象を取り上げてきました。共通語の普及によって方言はただひたすら衰退に向かっていると考えられがちですが、意外にそうでもないことがわかっていただけたのではないのでしょうか。今以降も数回にわたって、井上史雄氏の言う「新方言」の例をご紹介しますことにします。

命令的表現には多彩な表現形式が

朝、なかなか起きて来ない家族に「早く

起きろ」「早く起きなさい」のように言うとしたら「起きろ」「起きなさい」にあたる表現は? こういう質問に対して、小松市中心部の龍助町・東町の皆さんからは、オ

キンカイヤ(オキンカイネ、オキンカイ、オキンを含む)、オキマ(オキ、オキヨ、オキヤ、オキヤを含む)、オキネ、オキテ、オキマツシ、オキ口、オキレなど、様々な言い方が聞かれました。これは、同じような場面でも、きつく言う場合、優しく言う場合で色々な表現が可能なためです。

これらのうち、本連載のタイトル「みまっし、きくまっし」にも使っている優しい命令表現オキマツシは女性の使用が目立ちます。50歳代女性で約5割、60・70歳代女性で4割近くと年配の女性に多用され、20~40歳代以上の女性でも2割から3割近く使用されています。それに比べて男性のオキマツシは、70歳代でこそ2割近い使用が見られますが、60歳代以下では1割前後しか見られず、それに代わってオキンカイヤの使用が増えます。オキマの類も男性に多く(特に40歳代以上)で聞かれ、命令的表現では、女性の方に優しい言

は、全世代で使用される共通語的なスゴク(スゴク、スゴイ、スゲーなどを含む)のほか、若い世代を中心にタツタ(タツタ、タタ、タータを含む)、メツチャ(メチャ、メツサなどを含む)が見られます。スゴクの類は50歳代以上では6割から7割近くの人に使われていますが、40歳代以下では3割前後に減ります。それに代わって、40歳代以下でタツタが3割前後、また30歳代以下ではメツチャも3割近く使われ始めています。特に20歳代の女性でメツチャが4割近く使われているのが目立ちます。

タツタは副詞「ただ」の強調形として小松で独自に生まれた形と思われ、「タツタ腹へった」のように使われます。強調語タツタは、県内では七尾市など能登地方の一部でも生まれているようです。一方、メツチャは明らかに関西地方の影響を受けて使われ始めた形です。メツチャは、小松に限らず県内の若い世代で勢力を広げている形で、石川のことばがいまだに関西方言の影響下にあることを示す例です。両者とも今後さらに勢力を伸ばしていくだろうと予想されます。

い方が使われやすくなるのがわかります。

「一段動詞の命令形で〜レ(オキレ、アケレなど)が増加

一方、共通語的なオキ口、オキテは、若い世代を含めてまだそれほど使用されていません。それに対し、20歳代以下で急増するのがオキレです。男性で3割から4割近く(女性では20歳代で1割、10歳代で2割ちょっと)使われています。この形は、五段階動詞の中でも数が多いラ行五段階動詞「取る」「走る」などの命令形「取レ」「走レ」などの形に類推して、「一段動詞」起きる」の命令形を「起きレ」としたものです。同様に「見る」「開ける」などの「一段動詞」の命令形でも「見レ」「開けレ」などの形が聞かれます。小松をはじめ、加賀地方の若年層で新しく広まりつつある「新方言」形の一つです。「一段動詞の可能動詞化(見レル)」「起きレル」などの俗に言う「ら抜きことば」が、ラ行五段階動詞の可能動詞形(取レル)「走レル」などへの類推によるものであるのと共通する現象として興味深いものです。

連載 48 新しい方言⑤ 書けレル、書けレン



「うまく書けたかな？」と先生。「だめや書けれん」 芦城小学校で

前回の最後で一段動詞の可能動詞化（「起きレル」「食べレル」などの俗に言う「ら抜きことば」）のことに触れましたが、今回は、それと関係の深い五段動詞の可能表現に見られる小松の「新方言」、書けレル、書けレンの類をご紹介します。

加賀地方は一段動詞の可能動詞化（ら抜き）の先進地域

少し固い話になりますが、動詞の可能表現は学校文法的に言うところ「書かれる」「走られる」のような五段動詞未然形+

レル（可能の助動詞）の形「見られる」「起きられる」「寝られる」のような一段（上一段・下一段）動詞未然形+ラレル（可能の助動詞）の形が本来の形でした。

ところが、五段動詞のグループでは、江戸時代ごろから「書ける」「走れる」のような「可能動詞」形が現れ始めました。これは、助動詞「れる」が「可能」の意味のほかにも「受身・尊敬・自発」という複数の意味を持つために、「可能専用の形が求められた結果でした。そして、五段動詞では今や可能動詞形が共通語としての地位を得ています。日本語の乱れとしてよく話題になる「ら抜きことば」は、五段動詞の可能動詞化の後を追って起こった、一段動詞の可能動詞化という合理的な変化なのです。

特に、小松市や金沢市を含む加賀地方北部の方言では、一段動詞の可能動詞化が非常に進んでいます。その結果、五段動詞でも数の多いラ行五段動詞の可能動詞形（「走レル」「取レル」など）と合わせて、動詞の可能表現形は「〜レル」という形が多数を占める結果となったわけです。

五段動詞（ラ行以外）の可能表現でも〜レル形が増加

一段動詞の可能動詞化が進んでいる金沢市や小松市の方言では、すでに可能の意味を含んでいるはずのラ行以外の五段動詞の可能動詞形「書ける」「話せる」「勝てる」「読める」などが、ラ行五段動詞の可能表現形や一段動詞の可能動詞形に合わせて、「書けレル」「話せレル」「勝てレル」「読めレル」という新しい方言形を生みつつあります。小松市中部（龍助町・東町）での小川有美さんの調査では、「書けレル」「書ける」「書けレン（書けない）」の「新方言」形が高年層で既に見え始め、50歳代以下で次第に増えつつあることがわかりました。肯定形「書けレル」は40歳代女性で約半数、20歳代女性で4割強、否定形「書けレン」も20歳代男女で約半数の人が使っています。

多数派の形に一本化しているという合理的な意識が、本来直さなくていいものまで直し過ぎてしまった現象（専門的には「過剰修正」などと言われます）です。

連載 49 新しい方言⑥ ヤッキネー・ムズイ



「ヤッキネーときもあつけど…」、練習が始まれば、みな真剣です。芦城中の男子バスケット部、市末広体育館で

早いもので本連載も今月から5年目に入ります。今月も前回までと同様、小松での新しい方言（中でも井上史雄氏の言う「新方言」）をご紹介します。今回は、「やる気がない」の意のヤッキネーと「難しい」の意のムズイです。

ヤルキナイが若い世代でヤッキネーに

先に1月号で、若い人が好むと言われる強調語（「とても」にあたる）の新方言、タツタ、メツチャをご紹介しますが、最近の世の中、「やる気がない」にあたる言い方も若い人の口からよく聞かれるようになります。

小松市中部での世代別調査によると、「やる気がない」にあたる言い方に、40歳代の女性と50歳代以上の人の6割以上

がヤルキナイ（ヤルキネーを含む）を使っているのに対し、40歳代の男性と30歳代以下ではヤルキナイが2〜3割に減り、5割から6割の人がヤッキネー（ヤッキナイ、ヤッキゼ口を含む）を使っています。60歳代以上では1割も見られないヤッキネーが40歳代を境に若い世代で急増しているわけです。形の上ではヤルキナイがヤルキネー、さらに「ル」が促音化してヤッキネーへと変化したのですが、日常場面では今後さらに若い世代で勢力を伸ばすに違いありません。

ムズカシーが若い世代でムズイ、ムズジーに

「難しい」にあたる言い方では、同じく小松市中部部の40歳代以上の人のほとんどがムズカシーを使っているのに対し、30歳代以下でムズイ、ムズジーが現れ始めます。先のヤッキネーに比べるとその使用はまだ多くありませんが、それでも20歳

代・10歳代の男性では、ムズイとムズジーを合わせると約半数の人が使っています。ムズイとムズジーも今後さらに勢力を伸ばすと思われる。

ヤッキネーもムズイも加賀地方全体の方言

ところで、ヤッキネーもムズイ、ムズジーも小松だけで使用が増加している新方言というわけではありません。筆者の指導で、4年前に、JR北陸線に沿って金沢市から加賀市までの範囲（各駅周辺の12地点）で方言の地域差と世代差（70・50・30・10歳代の4世代）の調査をした小松市出身の田中铁哉氏（現在金沢市立西南部小学校教諭）の卒論資料によると、「やる気がない」では金沢市から加賀市までの全地点の30歳代以下にヤッキネーが見られますし、「難しい」でも全地点の10歳代以下にムズイ、ムズジー、ムズイが見られます。つまり、これらは加賀地方全体での新方言でもあるのです。特にムズイは、ムズカシーの縮約形として全国的に広がりつつあるものとも一致します。

連載 50 新しい方言⑦
ゝシ、ズツパスル



「先生に怒られるし、ズツパスルのやめようつと」。
西出祥子さん(右)と杉山千弥さん。
小松市立高校のロビーで。

昨年の11月以来、小松市中心部において新しく生まれている方言現象のいくつかをご紹介しますでしたが、「新しい方言」シリーズは7回目の今月で終わることになります。これまでに取り上げてきた、真田信治氏の言う「ネオ方言」や井上史雄氏の言う「新方言」の例からは、方言がただ衰退しているばかりではないことを知っていただけたのではないのでしょうか。今回最後に取り上げる「ゝシ、ズツパスル」は、ともに女性優位の新方言の例です。

「ゝから」は、ゝサカイ・ゝサケに代わってゝシが増加

アメ フットツタサカイ(サケ)キノー

連載 51 虫の方言へめんぼへ

先月までの「新しい方言」に代わって、今回からは再び小松市内の高年層(主に70歳以上)の方々に受け継がれ、使われてきた方言をご紹介します。ことにします。

本連載では、これまでもへめんぼ(98年9月)、へかめ虫(98年10月)、へ蜚(99年8月)といった虫の方言を取り上げてきましたが、今月はへめんぼの方

言を取り上げてみたいと思います。

へめんぼとへみずすましは同じ虫。へめんぼというのは、体が細長い棒状で長い足を持ち、池や水たまりなどの水面をスイスイ滑走している虫です。漢字では「水馬」「水龜」「蛤坊」などと書き、共通語形でもあるアメンボという名は、体が蛤のような臭いがすることに由来すると言われています。

小松市内でへめんぼの方言形として一番多く聞かれたのがミススマシ(ミ

ワ イカンダ(雨が降っていたから昨日は行かなかった)

共通語の理由・原因を表す接続助詞「ゝから」にあたる形は、このように、かつて近畿方言の影響を受けて北陸地方に広がったゝサカイ・ゝサケが小松では使われてきました。市中心部(龍助町・東町)での世代別調査の結果でも、30歳代以上では、ゝサカイ・ゝサケが最も優勢です。しかし、20歳代以下になると、共通語形ゝカラ以上に、ゝシの使用が増加します。特に20歳代の女性では9割の人がゝシを使用していて、ほかの世代でも男性に比べ女性にゝシが多く用いられている傾向が見られます。今後は共通語形ゝカラとともに、ゝシが小松の「新方言」としてさらに勢力を伸ばしていくことになりそうです。

ズツパスルは学校で生まれた「新方言」

年輩の方には、ズツパスルがどういう意味か、わかる人は少ないでしょう。ズツパスルとは「ズツク」の踵の部分の踏んで

ズムシを含む)です。これまでに調査した111集落のうち約半数の集落で聞かれました。共通語ではミススマシという川や池などで水面を旋回する体長1センチにも満たない黒色で卵形の小さな別の虫をさしますが、同じ水面で見られる虫同士ということで、ミススマシの名がへめんぼの方言形として横すべりしたのだろうと考えられています。へめんぼとへみずすましを比べると、その大きさなどからも明らかにへめんぼの方が人の関心を引きやすい虫です。「この虫の足を食べると泳ぎが上手になると言われた」(荒木田)という話も聞きました。水面を軽やかに滑走するへめんぼにはアメンボよりへみずすましをさすミススマシの名の方がふさわしく感じられたのではないのでしょうか。同時に調査したへみずすましでは、共通語的なミススマシもかなり聞かれましたが、無回答(どんな虫のことかわからない)虫はいるが名前はないなどの(の)集落も多くなっています。

履いて歩く)こと、すなわち、ズツクをスリッパのように履くという意味で、傍線部分をくっつけて名付けられたものの上です。30歳代以上ではほとんど聞かれないこの言い方が、市中心部では20歳代以下で突然現れます。ただ、かなり性差が見られ、20歳代と10歳代女性の4割余りがズツパスルを使うのに対し、男性では、20歳代でまだほとんど聞かれず、10歳代でようやく2割を超える程度になります。一般に「新方言」形は男性優位で広がる傾向が見られるのですが、ズツパスルの広がり方はその逆になっています。ズツクの踵を踏んで歩くのが女性に多いということでもないと思うのですが、とにかくこの形が、ズツクを履くことの多い学校で使用され、広がった、学校内「新方言」であることは間違いないさそつです。このズツパスルは、金沢市内でもすでに10年以上前から使われていたという報告があり、小松で独自に生まれたものか、金沢の「新方言」の影響を受けたものかは、はっきりしません。

ユニークな名のへめんぼ方言も

共通語形アメンボもミススマシに混じって点々と聞かれますが、それ以外にも小松で独自に生まれたのだらうと思われるユニークな名も聞かれました。マンサイ(丸山)、オヨビカキ、オヨビカケ(松岡・金野・金平)、シオ、シオトリ(中海・軽海・荒木田・花立)、ジーカキムシ(小野・三谷・矢崎・林・矢田野)、カワノカンサマ(原・打越・大島)、そして大杉谷川上流部のアブラヤノカカサ類(アブラギカカサ、アバイカカサ、アツバサ、アツバヤなどを含む)がそれです。ジーカキムシは「字書き虫」、カワノカンサマは「川の神様」、アブラヤノカカサは「油屋の母様」の意かと想像していますが、特にアブラヤノカカサについては、その名の由来を知りたいものです。

連載 52

虫の方言―再び「蛭」の方言



「ほら、見てごらん。大きいのが源氏ポタルで小さいのが平家ポタルだよ」、「ふ〜ん」。「オスはメスの2倍光るんだって!」、「ひえ〜」。環境企画課が開催した日用川の「ポタル観察会」にて。

今年もまた蛭の飛び交う季節になりました。一時期農業などの影響で激減した蛭も、最近では再びその数が増え始めたようです。豊かな自然環境を守ることで、夏の夜に淡く光る蛭の姿を、これから先も変わらずに見たいものです。

本連載では99年8月に「一度「蛭」の方言」と蛭とり歌を取り上げましたが、その後の調査で明らかになった市内全域の分布をもとに、今一度「蛭」の方言をご紹介します。

全国的に方言量の少ない「蛭」の方言

我が国で方言量が最も多いとされているのは「白高」で、全国で五千種以上の方言形が報告されています(連載99年7月参照)。ところが、『日本方言大辞典』(小学館)などによると、「蛭」の方言には逆に全国的にあまりバリエーションが見られず、ホータル、ホタル、ホタルコ、ホータロ、ホータリなど、多くはホタルの音変化形です。源氏物語「第二十五帖の巻名」蛭、「枕草子」の冒頭(一段)の「夏はよる。月のころはさらす也。闇もなほほたるの多くとひちがひたる」の例など、ホタルの呼称は、古来、文学作品にもよく登場し、それが標準語的に長く使われ続けてきたものであることがわかります。

新たな方言形にホッター、ホタツコ、ホタルッコ

ところで、小松市内での「蛭」の方言形には、先に99年8月号で紹介した、ホタル、ホータル、ホタルコ、ホッターコ、ホッターリコのほか、その後の調査で新たに、

ホッター、ホタツコ、ホタルッコの形を確認しました。

ほぼ全域に分布の見えるホタルは、小松での「蛭」の呼称としての古い分布と、共通語形としての新しい分布が混在した状態と見ることが出来ます。大日川、郷谷川、大杉谷川流域をはじめとする、市の周辺地域でのホタルは恐らく古いものでしょう。そして、そのホタルからは、ホータル(大杉中町・赤瀬・長谷・大野・東町)、ホッター(梯:ホッターコの省略形の可能性も)が生まれ、さらに「蛭」の小ささに注目したホタルコ(「ホタル+コ」(子)の意)が生まれ、それをもとにホタルッコ、ホタツコ、ホッターコ、ホッターリコの音変化形が生まれたと考えられます。このうち、小松市中心部の旧町域をはじめとして、JRや小松バイパス沿いの地域と津上川・鍋谷川・梯川流域にまとまって分布するホッターコ(ホッターリコを含む)が最も新しい勢力のようです。

蛭の飛び交う姿はこれからも見られるでしょうが、こうした方言形はまもなく忘れ去られる運命にあるのでしよう。

連載 53

虫の方言「蟻地獄」その1

「蟻地獄」という虫は、家の縁の下や神社の境内などの乾いた細かい土に、小さなすり鉢状の穴を作っているウスバカゲロウの幼虫のことです。「蟻地獄」の名は、「蟻にとつての地獄」、すなわち、この虫がすり鉢状の穴に潜み、そこに落ちた蟻などの小昆虫を捕食するところからきています。

ところで、全国的にみると「蟻地獄」の方言形もまた多彩です。民俗学者柳田国男は早く、『西はどちー国語変遷の二つの例一』(昭和25年)の中の「蟻地獄と子供一特に疎開の少年の為に」で、蟻地獄の方言形の種類が多く全国で100以上ありそうなこと、それが、この虫とともに遊んだ子どもによって名付けられたことと関係があったらしいと書いています。

これまでに本連載でご紹介してきた方言の中でも、京都(中央)発信型の方言は別として、方言量の多いものには、子どもと世界と関係の深いものが多いのです。

おとなに比べて子どもは行動範囲は狭いので、狭い領域ごとに異なる方言形が生まれやすいのです。

小松では50種類近くの「蟻地獄」の方言形

柳田国男のことを裏付けるように、小松市内でも110地点から50種類近い方言形(発音がわずかに違うものを含め)を聞くことができました。「倉車」方言(「広報こまつ」連載2001年10月号参照)こそ及ばないものの、小松でも方言量の多いものの一つと言えます。今月と来月の2回にわたって、多彩な「蟻地獄」の方言の世界をのぞいてみましょう。

小松市内で聞かれた50種類近い方言形のうちには、ほかに類似の方言形がなく、ある集落だけで聞かれたという方言形(こういうのを「孤例」と言います)も少なくありません。そのような方言形は来月で紹介することにして、似た方言形が複数の集落で聞かれたものから見ていくことにします。

イリコカキムシは「イリコ掻き虫」の意

まず、市内東南部の郷谷川流域と大杉谷川下流域にはイリコカキムシ(東山)、イリコカクムシ(波佐谷)、イリコカキ(尾小屋・波佐谷・日用・東山)、イリコムシ(波佐羅)、イッコムシ(波佐羅)の類が分布します。イリコカキムシが元の形で、「蟻地獄」を捕まえるときに、子どもがすり鉢状の穴の土をイリコ(麦焦がし:大麦を煎って焦がし、石臼でひいて粉にしたもの。これに砂糖を混ぜ、湯で溶いたりして食べた)に見立て、それを掻き混ぜるようにするところから名付けられたものでしょう。

また、郷谷川下流域の金野・金平では、ウスリムシが聞かれました。穴から「蟻地獄」をおびき出す動作とウスリ(米を精米すること)がどこかで似ているからでしょうか。

小松の「蟻地獄」方言はまだまだまだたくさんあります。次回に続けますのでどうぞお楽しみに。

連載 54 虫の方言〈蟻地獄〉その2



小さいころ、よく遊んだ神社の境内へ。「あつ、この穴は?」「う〜ん、いないよオ〜」この日、天眼鏡で蟻地獄は見られなかった。ああ残念。

先月号に続いて〈蟻地獄〉の方言について見ていきます。

共通語形と一致するアリジゴクは市内中心部(旧小松町域)にまとまった分布が見えます。それ以外に複数の集落(地点)で聞かれた方言形には、前回ご紹介したイリコカキムシ類、ウススリムシのほかにも、スリバチ類(スリバチ、スルバチ)、チジ類(チジ、チリ)、ジョンコ類(ジョンコ、オジョンコ、ジョンノコ)があります。スリバチ類は小松バイパスに沿った南部地区の津波倉・林・ニツ梨・馬場・那谷、そして南に接する加賀市米谷に見えます。

〈蟻地獄〉のすり鉢状の穴の形に注目した命名でしょう。チジは本江・滝ヶ原、チリは西俣で聞かれました。チジもチリも本来頭の旋毛を指す方言形であり、この虫を捕まえるときの子どもの動作(すり鉢状の穴を指で渦を描くように探る)から名付けられた名と思われまます。

ジョンコ類は北部の上八里・下八里・中海そしてそれに続く辰町和気・寺井町佐野に聞かれます。その名の由来はよくわかりませんが、下八里ではこの虫を捕まえるときに唱えることが「ジョンコジョンコ」「アアコイ トトガ ママ クラス」だったと言います。

多彩な孤例が全域に点在

ある集落だけにしか聞かれない方言形を「孤例」と言っていますが、小松には実に多彩な〈蟻地獄〉方言の孤例が聞かれました。すべてを挙げることはできませんが、主なものを紹介しましょう。

〈蟻地獄〉が蟻を捕食する習性、あとずさりをする習性などに注目したと思われ

れる名に、アイクイムシ(矢田野)、アリズカ(蛭川)、スナジゴク(軽海)、アナホリ(那谷)、スナモグリ(松岡)、ウシヨシザリ(「後ろずさり」から。古府)、スモトリムシ(本河田)があります。ジクボ(矢崎)は、〈蟻地獄〉を土の中の蜘蛛に見立てたものでしょう。

先のジョンコ類同様、この虫を捕まえるときの唱えことばに現れる名が答えられているのが、ジロータロー(中ノ峠)、カカツコ(里川)、エツ(安宅)、チンコバ(安宅新町)です。それぞれ「ジロータロー、カンポイン」「カカツコ、カカツコ、オイデ」「エツ、エツ、デテコイ、オヤノウツチャ、カジャ」「チンコバーバ、ミズモツテ、オイデ」という唱えことばを聞くことができます。

タニヒヨコ(花立)、トリスミ(丸山)、トロンコ(大杉上町)、チチクビチンマ(大島)、サケノミジサン(日未なども聞かれました。サケノミジサンは「すり鉢状の穴が盃の形に似ているから」とのことです。〈蟻地獄〉を捕まえるときの楽しげな子どもたちの表情が目に浮かぶようです。

連載 55 動物に関する方言あれこれ その1

本連載ではこれまで主に、小松市内全域約110集落で行った言語地理学的調査の結果をもとに、〈肩車〉〈おたまじやく〉〈蟻地獄〉などの各項目ごとに、市内で聞かれる方言形を紹介してきました。

意味分野ごとに約2,300項目の生活語彙も調査

小松市立博物館の委託を受けて実施した方言調査では、言語地理学的調査以外に、毎年1集落を定めて約2,300項目にわたる生活語彙の聞き取り調査をしました。大杉町、尾小屋町、符津町、龍助町、安宅町の5集落です。約2,300の項目は意味分野で、「天地・気候」「動物」「植物」「人体」「衣」「食」「住居」「民俗」「遊戯」「教育」「人間関係」「社会・交通」「行動・感情」「時間・空間・数量」「職業」「農・林・漁業」「勤怠・難易・経済」「助詞・助動詞」その他の18分野に大きく分けました。

今月からは、これまでとは少し趣向を

変えて、先の5集落で聞かれた生活語彙の中の方言を、分野ごとに見ていくことにしたいと思います。第1回目は、先月までの「虫」の方言とのつながりで、「動物」に関する方言を取り上げます。なお、これまでの連載の中でご紹介したものは省略します。

人間の男と女、動物の世界ではオンドとメンド

動物には雄と雌がいますが、雄をオンド、オント、雌をメンド、メンツなどと言います。もちろん人間の男と女をさしては言えません。牛の中でも雄の牛(牡牛)はボー、雌の牛(牝牛)はチチウシ、メンドです。

犬ではイン、イーヌ、馬はマンマのように発音されることがあります。兎かオサギとなることもあります。また、牛や馬犬などの尾のことはシッポのほか、オッポ、オノボと言います。

カワフソは今では見るごとのできなくなった川獺の音変化形、トバは鮎ムジナは穴熊のことです。畑や田の畦などに穴

をあけて困らせる土竜はモクロと呼ばれます。

トリー(鳥)、イーヌ(犬)は南加賀地方の特徴

総称としての鳥はトリー(傍線部が高く発音される)と言われることがありますが、このような発音はイーヌ(犬)、アーシ(足)などとともに、2拍名詞の一部に聞かれ、南加賀地方(旧能美郡を中心とした)の方言の特徴とされるものです。

トット、トットトは鶏のことを言う育児語、デッポポ、デッポポ、カッポカッポは鳩(山鳩)のことです。蝙蝠はコンモリコ、コンモリ、雲雀はヒバリ、燕はツバク口、鼻はフクロ、鶴鴒はイシタキの方言形が聞かれました。鳩の方言デッポポ、デッポポなどはその鳴き声を映したもので、鶴鴒のイシタキは水辺の石の上で尾を上下に振る姿から「石叩き」と名付けたものでしょう。

動物に関する方言は、次回にまた続けます。

連載 56

動物に関する方言あれこれ その2

先月号に続いて、大杉町、尾小屋町、符津町、龍助町、安宅町で聞かれた、生活語としての動物(生き物)に関する方言を見ていくことにします。

今年は例年になく暑い日が続きました。11月と言えば晩秋、あと1か月もすれば北陸はまた雪の季節を迎えます。私たち人間も冬支度をしなくてはなりません。自然界の生き物たちも同様に冬の準備を始めているに違いありません。

さて、冬眠する生き物に蛇がいます。蛇の方言では、総称の(ヘブ)大杉、青大将のヌシ(符津)、ひばかりのヒワカリ(符津)を聞きました。ヌシは青大将が家の主のように住みついているところから、ヒワカリはこの蛇に噛まれると命はその日ばかりというので「日別れ」からとの説明が聞かれました。蛇がとぐるを巻くことをサラマクとかサラナンナットルと言います(大杉)。また、蛇と同じ爬虫類の蜥蜴(トカゲ)は、トキヤク(尾小屋・符津)が聞かれます。

た。井守に触るとメモライ(麦粒腫)ができてる？

水中の生き物の方言に、井守をさすアカハラ(符津・龍助)、メモライ(尾小屋)があります。アカハラは、井守の腹が赤いことからの命名です。また、メモライは井守を触るとメモライ(小麦粒腫の方言形)ができるからとの俗信によるようです。泥鰌ではジヨシヨ(大杉)も聞かれました。蛭の幼虫の餌になるという川蝮にはジナ(大杉・尾小屋)、田螺にはツープ(符津)の方言形も聞かれました。また、海の牡蠣(カキ)は柿(カキ)と区別するためにカキガイ(龍助)とも言われるようです。

日中、野良仕事などしていると飛んできて血を吸う小さな虫、蚋(ハエ)はフト(大杉・尾小屋・符津・龍助・安宅)、ブト(大杉)です。昔はこの虫が近づかないように、カンコという、布を巻いて火をつけたものを腰につけたりしたものです。また、ブト同様に山中などで飛んで寄ってきて刺す嫌な虫の虻(ハチ)は共通語と同じア

ブと呼ばれるのですが、小型の虻にはオロ(尾小屋)という方言形が聞かれます。

ハエボンボ、ハイボンボとは蠅のこと

蜘蛛でキボ(大杉)、百足でムカジヨ(大杉)、ムカゼ(尾小屋・符津)、蜂で、バチ(大杉)、蠅でハエボンボ(安宅)、ハイボンボ(大杉・龍助)、ハエボ(尾小屋)、ハイ(符津)などの方言形も聞かれました。ハエボンボ、ハイボンボとは何ともかわいい名です。ちなみに、大杉町では蜂がバチとなり、ハチとは狸をさしたとのこと。

なお、前回取り上げた動物に関しては、ほかに以下のような方言形も聞かれましたので、追加でご紹介しておきます。土竜のムツゴ(大杉)、梟のフクドリ(大杉)、編蝠(トモリ)のコーモリコ(安宅)などです。

今月はこれで字数が尽きました。次回もまた、魚の名前など動物(生き物)に関する方言を続けます。

連載 57

動物に関する方言あれこれ その3

今月も前回、前々回に続いて動物(生き物)の方言を見ていくことにします。まずは魚の名前を漁港でもある安宅町の例を中心にみてみましょう。

コヅクラ、フクラギ、ガンドは出世魚「鱒」の方言

北陸を代表する魚「鱒」は、成長とともに名前を変える、縁起のよい出世魚としても知られています。その段階名特に小さい段階の名には全国で多くの方言形が聞かれます。小松では、鱒の小さい方から、コヅクラ↓フクラギ↓ガンド(ハマチ)↓ブリと名前を変えます。ハマチ、ブリは全国的にも広く通用する名ですが、コヅクラ、フクラギ、ガンドは北陸地方の地方名と言えるものです。鱒の体形に注目して、フクラギは「脹脛」から、ガンドは「籠灯」(かつて盗賊が夜に使用した釣鐘型の丸くて長い手提げ提灯)からとの語源説もあります。

安宅での魚の類の方言にはほかに、石鯛(イシダイ)、飛魚(トビウオ)、河豚のアオヤギ、かわはぎのバクチコキ、赤いコツペ、烏賊の工力、蟹のガン、水母のタブなどが聞かれました。中でも「かわはぎ」のバクチコキは、この魚の皮を剥いで食べる様子を、博打うちが勝負に負けて身ぐるみ剥がされる様に喩えた、何ともユーモラスな名前です。安宅以外では、魚の総称のトト・オトト(尾小屋)、河豚のフクノミ(尾小屋)、フグノミ(符津)、雑魚をさすザッコ(尾小屋)、目高以外の川魚の幼魚をさすヘコタ(尾小屋・符津)、これを鍋で煮ると鍋が割れるという言い伝えがある、体長3〜4センチの泥鰌に似た魚をさすナベワリ(符津)などが聞かれました。

生活環境の変化で忘れ去られる虫の方言

これまでも本連載では、市内全域の分布をもとに、「鬼やんま」「かめ虫」「虫」「あめんぼ」「蟻地獄」の方言をご紹介してきました。前回も「蚋」「虻」「蜘蛛」

「百足」「蜂」「蠅」を取り上げましたが、それら以外の虫の方言をあと少しだけご紹介すると、かぶと虫の幼虫のゴツトムシ(符津)、毛虫のケナムシ(安宅)、蝶のチヨチヨボ(安宅)、あげは蝶のゴクラクチヨ(大杉)などがあります。

生き物の中でも、虫はかつて子ども遊び相手でした。かわい虫、きれいな虫は虫取りの対象として、こわい虫、嫌な虫は虫退治の対象として、子どもにとって身近な存在でした。そして、それらに方言としての様々な名づけをしました。しかし、生活環境が変化し、最近の子どもたちは虫と遊ばなくなりました。かつての子どもは、虫を捕まえ、虫と遊ぶ中で、自然に命の大切さを学んでいたようにも思います。子どもたちをめぐる環境の変化は、虫の方言だけでなく、人としての大切な体験をも奪おうとしているのかもしれない。

次回からは、「人の性向(性質)を表す方言」の豊かな世界を見ていきます。